



狙って！当てて！モルックに挑戦！！

5月24日(土)、更埴公民館運営協議会主催の分館役員研修として、「モルック」の体験会を東部体育館で開催しました。

モルックとは、木製のピンをめがけて木の棒を投げ、チームで50点を目指すフィンランドで生まれたニュースポーツです。

参加した皆さんは、狙いを定めて、真剣な表情で勝負に挑んでいました。

特集 平和への思い

《主な掲載記事》

各館の活動報告……………	2～3
特集 平和への思い……………	4～6
＜お知らせ＞……………	7
短詩型文学祭の作品募集	
成人式のお知らせ	
文化祭のお知らせ	
もっと知りたいふるさと……………	8
(羽尾地区)	

各館の活動報告

屋代公民館

「ゆうゆう学級」初参加

生萱 西村 幸雄

5月13日(火)、「ゆうゆう学級」の開講講座に参加しました。参加者が多く、静かな熟年パワーと熱気が感じ取られ「えらいところに入講したな...」と思いました。

講座1つ目は、長野県考古学会会長矢島宏雄先生の「古墳とまちづくり」を考える講演でした。内容はシナノの語源、古代の交通路、森將軍塚古墳に埋葬された豪族の大和王権との強い関係を詳細な資料から聴きました。また森將軍塚古墳一帯の復元整備、維持管理と活用についての多大なるご苦労とその経緯を深く知る機会となりました。地元に住んでいます自分の



熱心に聴く参加者



「能」の独特な世界を学んでいます

知識の無さを痛感しました。

講座2つ目は、無形文化遺産の「能」について、「のもだんの会」代表前山忠重先生の講演でした。一般庶民からはるか遠い、敷居の高い伝統芸能であり終生理解できない高尚なものと思い込んでいましたが、わかりやすいお話と映像、資料の説明から能の入り口を学び、知識が1つ増えました。また、「嫉捨」という能の演目があり、奥義を極めた役者が演じる最高位のものであることを聴き、驚きました。

2つの講座を通して、普段はなかなか見聞きしないこと、知らないことを知る機会を得て、有意義な時間を過ごすことができました。

1年間本学級に参加し、知識を広めたいと思います。

増生公民館

「すこやか学級」開講式に参加して

桜堂 小林 幸恵

息子夫婦の勧めで参加し始め、4回目の「すこやか学級」の開講式を迎えました。毎年公民館の職員の方々が、企画するいろいろな講座を楽しみに参加させていただいております。

今年の開講式のテーマは、「ヴァイオリンと箏とピアノのマチネ」健康長寿は音楽とともにでした。

まずは「マチネ」とは昼間の公演(フランス語で午前)との説明。講師のご紹介に続き、先生方の気さくなおしゃべりで、舞台との垣根が取り払われ、それぞれの楽器の個性を生かしながらの「かごめかごめ」「さくらさくら」等5曲の「調和」と「協調」の合奏が始まりました。



魅惑のハーモニーに酔いしれて

後半は、個々の楽器紹介と演歌メドレーの演奏。そして懐かしい唱歌「荒城の月」、この季節にピッタリの「茶摘み」「夏は来ぬ」の合唱、久しぶりに大声で歌いました。特に最後のアンコールでの曲、葉加瀬太郎作の「情熱大陸」は手拍子から体でのリズムの乗りは、まるでライブ会場のように、圧巻でした。

稲荷山公民館

祝 初優勝!!

上八日町 松林 里美

6月1日(日)、「稲荷山公民館分館対抗球技大会」(男女混合ソフトバレー)が行われました。わが上八日町はありがたいことに参加できる選手や「練習には協力できるよ」という方々も多く、おかげで和気あいあいとしながらも熱をもった大会に臨むことができました。

予選は西区と治田町区との対戦でした。声をかけあつて、失敗しても引きずることなく勝利することができました。決勝は中区、小坂区との対戦でした。ここで監督の勝負師の一面が垣間見られたと同時に「いつも取れない球も拾えている。皆すごく良いよ」との言葉にさらにやる気が鼓舞



各コートでは試合が白熱しました

され、気づけば優勝することができました。長年分館バレーに携わってきたキャプテンの涙には温かい気持ちになりました。今まで楽しく繋いできた方たちのおかげで今年も楽しく参加し、初優勝をつかみとることができました。打ち上げも互いを褒めたたえ、大いに盛り上がりました。選手の皆様、応援に来ていただいた皆様、準備していただいた役員の皆様、ありがとうございました。

優勝 上八日町分館
準優勝 小坂分館
3位 中区分館



念願の優勝!!
上八日町分館のみなさん



優勝した郡分館のみなさん

優勝!! 郡分館

唐澤 正弘

6月8日(日)、八幡公民館分館対抗スポーツ大会が開催されました。

今年は、天候に左右されずに屋内で楽しめる競技としてスマイルボウリングが採用されました。1チーム5人で編成され10本のピンをいかに少ない投球で倒すかを競う競技です。レーンには、ゲートが設置され、これを通してなければならず勝敗を分ける大きな力ギとなりました。

郡分館は、初戦からチームワークの良さを充分に発揮しAブロック1位通過とし、準決勝、決勝へと勝ち進み、見事に優勝することができました。

各ブロック間での交流戦も

生まれ、より各分館相互の交流が深まった大会となりました。地域のつながりの希薄化が進む傾向にあるなかで、こうした大会をはじめ、地域に密着した事業を推進する公民館の存在をより理解することができました。

結びに選手の皆さん、各分館役員の皆さん、公民館関係者の皆さんに感謝をいたします。

優勝 郡分館

準優勝 大池分館
3位 姨捨分館

戸倉公民館

初めての味噌づくり体験

前嶋 輝

20年ほど前に祖母が亡くなり、食卓の味噌汁の味が変わりました。父にそのことを尋ねると、味噌は祖母の手作りだったということを初めて知りました。それから、あの味をもう一度食べたい。私もいつか自分で味噌を作ってみたかと思っていました。今回たまたまチラシを見て応募させていただき、20年越しの思いを叶えることができました。

当日は、味噌汁好きの娘と参加しました。大豆と塩・麴



麴と塩を混ぜています

を娘と一緒に混ぜる作業はとても大変でしたが、講師の先生方が優しく手伝ってくださったり、お友達が声をかけてくれたりしたおかげで、少し粗めの特製味噌だねが完成しました。

最後に味噌玉を作って樽に投げ込む作業を見て、祖母が昔、台所と同じことをしていたことを思い出しました。「ばあちゃんのは味噌を作ってたんだ」と懐かしみながら、娘と一緒に味噌玉を樽に投げ込みました。

完成した味噌は、祖母の家に運びました。その時、娘と「この味噌でうまい味噌汁を作ろうね。手作りは絶対うまいから! 具材は何がいいかな」と話をしました。娘もご機嫌でした。半年後が楽しみです。



美しい音色に感動!!

上山田公民館

二胡演奏を楽しむ!!

堀内 愛子

5月14日(水)、上山田公民館のえびす学級開講式は、「高山賢人 with 緑風二胡楽団」による二胡演奏でした。二胡は、馬の尾の毛を張った弓で、2本の弦を擦って音を奏でる中国の伝統的な楽器です。どんな音色が響くのか、初めての生演奏を心待ちにしていました。



味噌だねを樽に隙間なく詰めます



高山賢人 with 緑風二胡楽団のみなさん

当日は、先生のソロ演奏「ムーンリバー」から始まり、生徒さん5人とのコラボ演奏も大変素晴らしく、二胡独特の高音の透き通る響きや、低音の心の奥に染み入る、甘く柔らかな美しい音色にとっても感動しました。

他にも、私たちのなじみの曲やオリジナル曲を演奏していただき、「見上げてごらん夜の星を」と「故郷」をみんなが歌って、楽しい時間があったという間に過ぎました。また、機会があったらぜひ聴きたいと思いました。

えびす学級は3年目となり、毎回楽しく受講させていたでいます。館長をはじめ、職員の皆さまのご協力のもと、いつまでも続けられたら願っています。

特集

平和への思い



今年は戦後80年の節目の年を迎えました。戦争の体験を直接語られる方が少なくなっている中、貴重な体験を掲載させていただくことができました。

また、戦争を知らない世代からも原稿を寄せていただき、「平和への思い」を共有し、戦争の悲惨さを次の時代に語り継いでいただければ幸いです。

大阪大空襲の記憶

上山田温泉 若林 鈴代

戦後80年も経つとあの頃の記憶は日々薄れてまいります。決して壮絶な記録ではありません。一般の国民学校児童の日常のひとつコマですが少しでも記憶のあるうちに出しながら書き始めました。

私は、昭和9年東京都豊島区に生まれ、昭和16年に国民学校と改名された年に入学しました。その年の12月8日に大東亜戦争が開戦し堤灯行列や旗行列に参加した覚えがあります。

その前年には皇紀2600年祭が挙行され、花電車を見に行ったりして世の中はとも華やいていました。

昭和18年秋、小学3年生の時に、父親の転勤で東京から

大阪府南河内郡（現堺市）に移り住みました。昭和20年になつた頃からは毎日のように大阪市街地に向かう米軍機が頭の上を低空飛行するようになり、そのたびに警戒警報から空襲警報へ、学校へ行った

り帰ったり、防空壕に入ったり出たりの日が続きました。あの3月13日未明の大阪市街地への大空襲の時は、私は15キロ以上離れたところにいました。B29爆撃機の大編隊の飛行による物凄い爆音とともに爆弾や焼夷弾がずさずい勢いで落とされ、その飛行機が去った後はまさに大阪中が真っ赤に燃える火の海で昼間のように明るく見えたのを記憶しております。



その時の大阪市への爆撃で妹さんが焼死し、ご両親が大やけどをした同級生と今も交流がありますが、その方々のお話や手記を読むと本当に心が痛みます。

その後も小さな都市や軍需工場を狙ったかと思われる爆撃は続きました。その当時は物資が不足していて親世代の人たちは苦労したと思います。

庭先にカボチャやサツマイモを植えたり、友達に教えてもらってほんの少しあぜ道で取ってきた野草やイナゴも母に喜ばれました。学校には素足に下駄で真冬だけは手作りの足袋でしたが、しもやけだらけでした。

「欲しがりません勝つまでは」「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ」などの国策標語に操られ我慢をさせられていた日々だったのです。

8月15日の暑い昼、聞こえにくいラジオからの玉音放送があり「負けたらしい」と言う祖父の言葉もよく理解できないものの、その日は警報のサイレンも飛行機の爆音も、ラジオからの大本営発表という騒がしい音もない、無音の世界だったような印象が思い出されます。

たぶん2学期が始まる頃だったと思いますが、それまでは登校時には頭を下げていた奉安殿も閉められ、教科書の一部を針と糸で閉じらされたり墨で塗つたりの作業もしました。

そのころからガラガラと世の中が変わり始めたのを子ども心にわかり始めましたが、戦争がないということは光を感じていたように思います。

これから戦争のない世を心から願っております。

小学生時代を思い出して書いているため、日時や間違っている事柄もあると思いますが、ぜひそのような場合はご容赦くださいますようお願いいたします。

※戦前の日本において、天皇皇后の写真と教育勅語を納めていた建物。

遠い記憶より 青いトマト

稲荷山 小林 けい子

戦後80年。時の流れの中、80年の月日を共に生きた私である。時代と共に飽食が科学がすごい勢いで進んでいく、そして人間の欲望、世界の絶え間ない戦い、あらためて平和とは…人々の笑顔は失われ心に痛みを感じる時、ふと遠い昔の記憶が…よみがえる。

終戦から昭和22年後半にかけて稲荷山地域の東部、かつての杏泉閣前の道はひどい砂利道で温泉の広大な土地は製材工場であった。砂利道から工場の奥に続くところに1本のトロッコ線が引かれ、芥川龍之介の「トロッコ」ではないが、子どもたちにとり夢の遊び場であった。汗を流す大人たちの仕事のあと、夏の日差しはまだ子どもたちが遊ぶには十分な明るさで、大人の目を盗んでのトロッコ乗りは悪さもあるが、規律のとれたガキ大将の命令で楽しく遊ばせてくれた。その時代はたくましい子どもたちの時代でもある。

そんなある日大将のTちゃん
が真剣に言った。「おい：この頃あの製材工場の小屋に灯りが点いたぞ：皆で行ってみるか？」その言葉に子どもたちは「オバケかなあ：」「どろぼうかな：」「口々に興味津々。だがその灯りが一週間以上続いた時、子どもたちは動いた。探検そのものである。5人の子どもたちが夜道をたどり着き、きしんだ板戸をソーツと開けた。

覗いた先に白い着物の若者が4人、松葉杖やギプス、包帯の下には片足だけ、また、手首もない人たちが体を休めていた。なんのためらいもなく引戸を引いた。5人の目と4人の目とが交差したとたん、白衣の兄ちゃんたちが手招きした。若い傷痍軍人の兵隊さんだった。国立病院が近くにあり泊りに来たのだ。子どもたちはすぐ仲良くなれる。「兵隊さん腹減ってねえか？」白い歯を見せ笑う兵隊さん。人情に厚い子どもたち。仲間を広げその日から食料集めに動き出した。昼間自分の畑他人の畑関係なく、青いトマトを採る。赤く実ったのは家族の口に入る。家からくすねた味噌で青いトマトは食

べられる。そんなことが大人の耳にも入ったが、子どもたちは平気で青いトマトを食す。「兵隊さん、戦争終わってよかったなあ」「生きてて良かったなあ。おじさん死んだぞ」「どこから来たかい。母ちゃんに逢いていかい：」好き勝手な子どもの問いにただ黙って聞いていた兵隊さんが一言「自分は生き残って辛いです。死んでいった友達に申し訳なかかです」その言葉を聞いた時、一瞬トマトの味がしなくなった。話しながら青いトマトを包丁で切る未熟な音。味噌をつけた青いトマトのあの味。涙を浮かべて「美味い」と言った兵隊さんのさわやかな声。どこの人かも知れない。その後彼らも去り短いひと夏の出会いであった。その後親たちの厳しい監視が続いた。



平和への思い

植生 斉木 規晃

今年は戦後80年の節目の年
ということもあり、さまざま

なメディアで戦争体験や戦争の悲惨さなどを訴える特集が組まれています。戦争を体験したことがない私たちの世代にとっては、これらのメディアからの情報でしか戦争について知ることができませんが、私たちの身近なところにもあります。例えば、松代大本営地下壕や平和祈念館（長野市）、戦没画学生慰霊美術館の無言館（上田市）、満蒙開拓平和記念館（阿智村）などを訪れ、戦争や平和について学んだり考えたりすることができます。

社会人になって何度か篠ノ井俊英高校郷土研究班の皆さま



ミサイルで破壊された
ハリキウの警察本部

んの案内で、松代大本営地下壕を訪ねたことがありました。戦後80年の節目の今年も戦争について改めて考える機会として、再び訪ねてみたいと考えています。

さて、世界を見渡すとロシアによるウクライナへの軍事進攻がいまだに続いていきます。連日、ミサイル等で破壊された街並み、避難生活を余儀なくされている人たちの映像がメディアで放送されていますが、80年前の日本も同じような惨状であったのではな

いかと思うと、胸がとても苦しくなります。3年前、仕事の関係でウクライナ避難民の支援活動をしている千曲市出身の坂本龍太朗さんと出会いました。坂本さんはウクライナの隣国ポーランドの日本語学校の教頭のかたわら、その学校にウクラ

イナ避難民を受け入れ、現在もお避難民への支援活動をはじめウクライナへ生活支援物資の搬入など、精力的に活動をしています。そんな彼の行動力や平和への熱い思いに共感し、少しでも活動への支援につながればと現在もお全国から多くの募金が集まり、支援活動に役立てられています。

千曲市にも庁舎1階総合案内の横に募金箱が設置してあるのですが、あるとき高齢の女性から「戦争を経験した者です。坂本さんの活動に感銘を受け、戦争の被害を受けている避難民の方のために役立ててほしい。私にはこれぐらいのこと（募金）しかできないが、2度とあんな悲しい戦争は起こしてはいけない」という電話をいただきました。戦争経験者だからこそ出てくる「言葉の重み」を感じたのを今でも鮮明に覚えています。

ドイツの敗戦40年にあたる1985年、ドイツ連邦議会でワイツゼッカー大統領は「過去に目を閉ざすものは、現在にも盲目となる」と語っています。過去や現在行われている戦争に目をそらすことなく、2度と同じ過ちを繰り返

返すことのないよう、しっかりと向き合って行動していきたいと思えます。戦争の悲惨さなどを語り継ぎ、平和の大切さを訴えるにはまだまだ経験が足りませんが、これから戦争や平和について学ぶ機会を大切にしたいと思えます。

最後に、市庁舎内にはウクライナ人道支援活動のお礼として寄贈された、ウクライナから避難した子どもたちが平和を切に願った描かれた絵や感謝状などが飾られています。また、8月5日から18日に



千曲市役所総合案内横に設置してある募金箱と平和を願う絵

けて平和首長会議主催による「こどもたちによる平和な絵画コンテスト」の入賞作品が

展示されますので、ぜひ皆さんも足を運んでみてはいかがでしょうか。

戦争を「知り、伝える」ことの意味

上徳間出身 村山 美耶子

私が初めて戦争に恐怖を覚えたのは、小学生のとき、湾岸戦争の映像をテレビで見たときでした。敵国にミサイルが撃ち込まれる様子を見て、「戦争はいいつ終わるの?」と翌日学校で先生に尋ねた記憶が今でも残っています。その後、学校の図書館にあった漫画や本を通して戦時中の暮らしを知り、家族が命を奪われる悲惨な現実に触れ、さらに強い恐怖を抱くようになりました。

日本は、戦後80年にわたり平和憲法を守り続けてきました。この平和の歩みは、過去の戦争への深い反省と、多くの犠牲の上に築かれたものです。つまり、私たちの暮らす社会にも確かに「戦争があった」のです。

私が現在取り組んでいる大学院での研究は、「デジタルアーカイブ」を通して戦争の

記憶を未来に伝えることを主としてしています。私が所属する研究室では、VR(仮想現実)を用いてウクライナやガザなどの戦地の現状を没入型体験として伝える試みや、被爆者の証言を記録した「ヒロシマ・アーカイブ」「ナガサキ・アーカイブ」の展示、さらには戦時中の白黒写真や映像のカラー化などに取り組んでおり



リキッドギャラクシー



難民キャンプにて

ます。これらのコンテンツは、「リキッドギャラクシー」と呼ばれるマルチディスプレイに映し出され、イベント等で展示されます。遠い地や遠い過去の出来事を、今ここに生きる私たちが少しでも身近に感じるための試みです。

戦争を体験した方が少なくなる今、私たちは「どう伝えるか」を真剣に考える必要があります。記録を残すこと、知ること、想像すること。これらは、同じ過ちを繰り返さないために必要なことです。

2010年、私はNGOピースボートの地球一周の船旅に乗船し、中東のヨルダンにあるパレスチナ難民キャンプでホームステイをする機会を得ました。現地でお会った難民の方が「どうか無関心でないでほしい」と語ってく

れた言葉が、今でも胸に残っています。また、ポーランドにあるアウシュビッツ強制収容所跡地では、日本人ガイドの方が「『平和』という言葉は慎重に使うべきです。自分だけの平和を守ろうとすることにより、戦争を引き起こすことがあるからです」と話してくれました。

実はこの千曲市も、かつて学童疎開を受け入れた地域です。戦争の影響は遠い話ではなく、この地にも深く刻まれています。地域の歴史を知ること、平和を考える第一歩です。そして、そうした記憶を次世代にどう残していくかは、私たちの課題です。

デジタル技術を活用することで、記録や証言はより多くの人に届く可能性を持っています。しかし、技術だけでは心には届きません。どう使い、どう伝えるか。その問いと向き合いながら、私はこれからも学び、記憶の継承に関わっていききたいと思っています。



短詩型文学祭 作品募集

千曲市と坂城町で構成する更埴公民館運営協議会は、第30回更埴地区短詩型文学祭を開催します。「応募要領」と「投稿用紙」は最寄りの公民館に用意してありますので、多くの皆さまのご投稿をお待ちしております。

【募集期間】 7月1日(火)～8月29日(金)

【募集部門】 短歌・俳句・川柳・現代詩

【投稿料】 投稿用紙1枚につき500円(小・中・高校生は無料)

【投稿先】 各公民館



令和7年度 千曲市成人式のお知らせ

日 時：令和8年1月11日(日)

○受付：午後12時50分～ ○式典：午後1時30分～

会場：信州の幸 あんずホール

対象者：平成17年4月2日から平成18年4月1日の間に生まれた市内に住所がある人、または市内の小・中学校に在籍した人です。*対象者には11月中旬に案内状をお送りします。

問合せ先：戸倉公民館(成人式当番館) ☎026-275-1490 または、最寄りの公民館まで。



第54回

上山田文化祭

●会場● 上山田文化会館

開催日程

11月1日(土)

展示発表…………… 9:00～17:00

ふれあいのど自慢…………… 15:00～17:30

11月2日(日)

展示発表…………… 9:00～15:00

青空市…………… 10:00～14:00

舞台発表…………… 10:30～15:00

◆ふれあいのど自慢参加者募集

ふれあいのど自慢に参加してみませんか。

申込先 上山田公民館(上山田文化会館内)

申込方法 公民館に用意してある「申込用紙」に必要事項をご記入の上、締切日までに上山田公民館に提出してください。

申込締切 9月14日(日)

問合せ先 上山田公民館 ☎026-276-5842

第23回

更埴地区文化祭

●会場● 信州の幸 あんずホール
(更埴文化会館)

開催日程 11月8日(土)～9日(日)

参加者募集！ 作品展示・舞台発表希望の方は

申込先 屋代・埴生・稲荷山・八幡の各公民館

申込方法 各公民館に用意してある「申込用紙」に必要事項をご記入の上、締切日までに提出してください。

申込締切 9月5日(金)

申込範囲 更埴地区にお住まいの方、またはお勤めの方で構成するグループ・サークルなど。

※詳細は各公民館へお問い合わせください。

問合せ先

屋代公民館 ☎026-272-0234 稲荷山公民館 ☎026-272-1009

埴生公民館 ☎026-272-0055 八幡公民館 ☎026-272-1076

第32回

戸倉文化祭

●会場● 戸倉創造館

開催日程

作品展示の部 令和8年3月7日(土)

舞台芸能の部 令和8年3月8日(日)

問合せ先 戸倉創造館 ☎026-275-6700

※「館報ちくま」及び「もっと知りたいふるさと」は千曲市ホームページでご覧になれます。

もっと知りたいふるさと

105

初雪のあと、白い三角形が冠着山の山腹に出現するのはなぜ？



初雪の時期の冠着山

に生えた急傾斜地でした。すぐ上に大きな岩壁（屏風岩）があり、そこから、崩れ落ちてきた岩や石ころが散乱しており、この斜面だけ木があまり生えていません。屏風岩から大きな石が絶えず落ちてきて、木が育ちにくいうえに、石ころばかりなので木も大きく成長しにくいのだろうと想像しました。そんな場所の敷地が三角形をしていました。

その岩石の散乱した三角形の傾斜地には、雪が降ると、地表に積もるもので里から見ると真っ白に見えます。

写真は、初雪が降った時期の冠着山です。平成29年発行の「美し さらしな」(編集長・西澤賢史氏)にある写真(故翠川泰弘氏撮影)が、「白い三角形」の話題にピッタリなので、この写真をお借りしました。

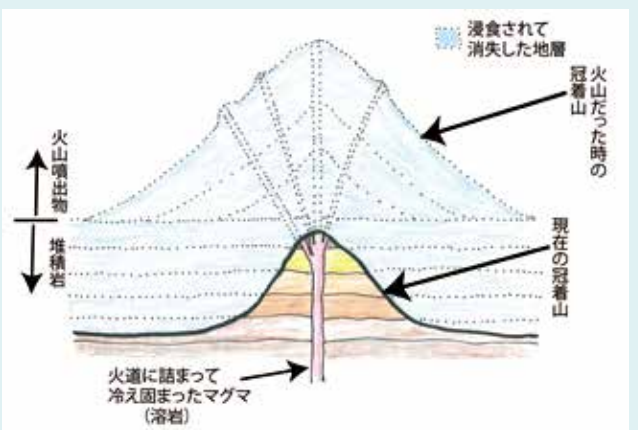
冠着山の山腹に見える白い三角形は、私の住んでいる地域からは、この時期によく見えます。春になって山に行ってみて、この三角形の場所を確認しました。そこは大きな岩や石が散乱し、木がまばら

さん生えている周辺では、初雪程度の雪の量では雪は木の根元に落ち、立ち木に隠れてしまつて、里の方から白い雪は見えませんが、そのため、木が少なくて石ころばかりの斜面は、白さの目立つ斜面になっていました。また、崖から落ちてくる岩の量は崖の中心部に多いので、この石ころの斜面の中央部は下の方まで伸び、その結果、石ころの斜面の形が三角形になったのだ

です。それと比べると、木がたくさん生えている周辺では、初雪程度の雪の量では雪は木の根元に落ち、立ち木に隠れてしまつて、里の方から白い雪は見えませんが、そのため、木が少なくて石ころばかりの斜面は、白さの目立つ斜面になっていました。また、崖から落ちてくる岩の量は崖の中心部に多いので、この石ころの斜面の中央部は下の方まで伸び、その結果、石ころの斜面の形が三角形になったのだ

600万年前頃(千曲市が、やっと陸になった時代)、今の冠着山のあたりにあった火山の、地下深部で冷え固まつてしまった溶岩の一部が、周りの地層と比べて固かったために、削り残されて児抱岩や屏風岩として地表に現れているのです。

羽尾第四区
明徳寺住職
信州大学名誉教授
塚原 弘昭



現在の冠着山ができるまで

編集後記

戦争の記憶が世間から徐々に失われていく中で、貴重な体験や平和への思いを寄せていただき掲載できました。体験を読むことで、戦争を身近に捉えることができます。兵隊さんの「自分は生き残って辛いです。死んでいった友達に申し訳なかつた」の言葉には胸が苦しくなりました。数年前の夏『世界中の息子たちへ』という一冊の本に出会いました。戦地の子どものたちの日常を撮った写真集で、南アフリカのボール遊びをする兄妹や、制服姿で笑いあう

(増生 ○)